



9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30

13
3103
-5

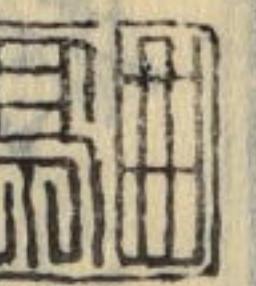
享德年間復讐小説

江戸曲亭主人著

月水奇縁

浪華文金堂藏

自序

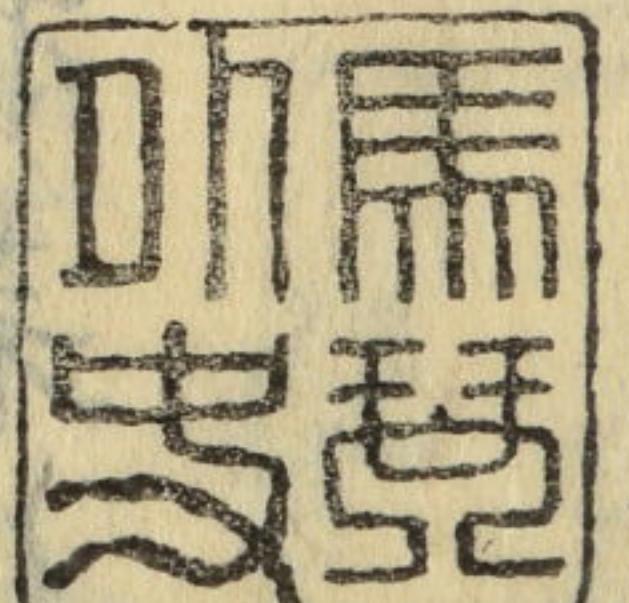
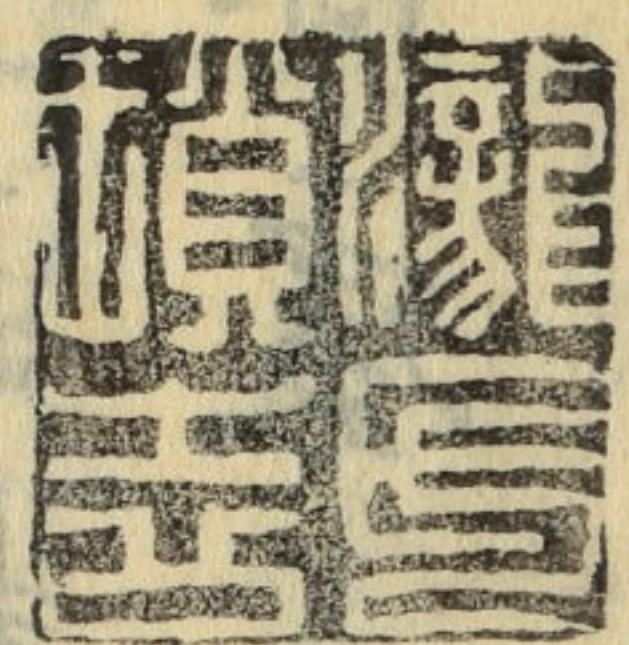


夫神靈怪異稗官野史所不載。有出于臆度之外。而至理存者焉。噫呼。天地大矣。萬物噴矣。惡乎有。惡乎不有。且人視聽不越几席之外。而復趾亦不出里巷之内。非以情

揣則以理格焉。是亦井彖也而已。予稟性殊庸。一書一槩之外。絕無他嗜好。每岑寂之時。喜錄閭里碑言。胞友晤譚。日積稍久。漸篇盈乃頽曰月冰。奇緣。聊借輝氏刀山劍樹之喻。以寫化人解脫之微意。惟

未免撈水弄月之誚。些可以懲惡獎善。謹者鏡焉。庶幾迷津之一筏矣。

享和三年歲在癸亥春二月上浣曲亭蟬史書於著作坐南牕紅梅深處



復讐言小説月永奇縁總目錄

通計十回

全部五卷

昭和九年九月二十三日
片末

金傳補光帝の應永二十四年より後荒園帝に享徳二年五月十九日
大七年の奇談を紀す。藻を纏ふ或は雅あり或は俗ありて。大半ワラビ
の鮮易ふとぞばく。油士の杜撰是らず。僅不誠文れ一體を脱ふる耳。

卷之一

第一回

蠻々貢レ鳥釀レ禍
國宰試レ鼠探レ獄
投ニ物老師説因果
千金冤鬼索ニ解脱

卷之二

第五回

第四回

卷之三

第五回

第六回

觀音堂靈箭救祖女
滋賀山強弓走阿紫
隔樓絃管運神情
停船釣竿叙恩
驚獵猴倭文憇第
逐野豬亥漢登雲山
吉墮河枯樹泣遭春
妹夫山壽松親折風
逐野豬亥漢登雲山
吉墮河枯樹泣遭春
妹夫山壽松親折風

卷之四

第六回

第七回

卷之五

第九回

第八回

忠臣促駕歸鑑倉
陷仇家玉琴死節
貞婦典身赴岐阻
陷仇家玉琴死節
貞婦典身赴岐阻
壯士吟詩謝恩
孝子古夢復讐
劍鏡奇遇馬籠巔
陰陽和合熊谷坡

姓氏目次

戌將

足利威氏

佐木高貞

植松憲忠

植松房頭

夫人

膳子

陪臣

永原左近

海都大膳

中村兵衛

熊谷倭文

孝子

中村兵衛

唐衣

婦女

玉琴

連漪

初女

六田處婆

石見太郎

劇賊

海道二

夜叉五郎

三上和平

處士

海道二

夜叉五郎

上市喜内

家吏

上市丹治

軍内

丹藏

○醫家

丹平

軍内

足立詔景

早瀬蟹庵

土人

○浮屠

拈舉老師

通計二十有七人

附評

○禽獸

舶來山雞

雪中野豬

閑室鼴鼠

白毛猕猴

千年靈鵲

檻中豺狼

羽隹寶刀

玄丘明鏡

○寶器

江州瀘賀

相州鎌倉

和州吉野

信州岐祖
月水奇緣總目錄畢

底州熊谷

○郡縣

星彩滿天朝北極
源流是處赴東溟

為臣為子須忠孝

莫負宣尼一卷經



水

白虹時

千年形已空

切玉紫

氣夜干

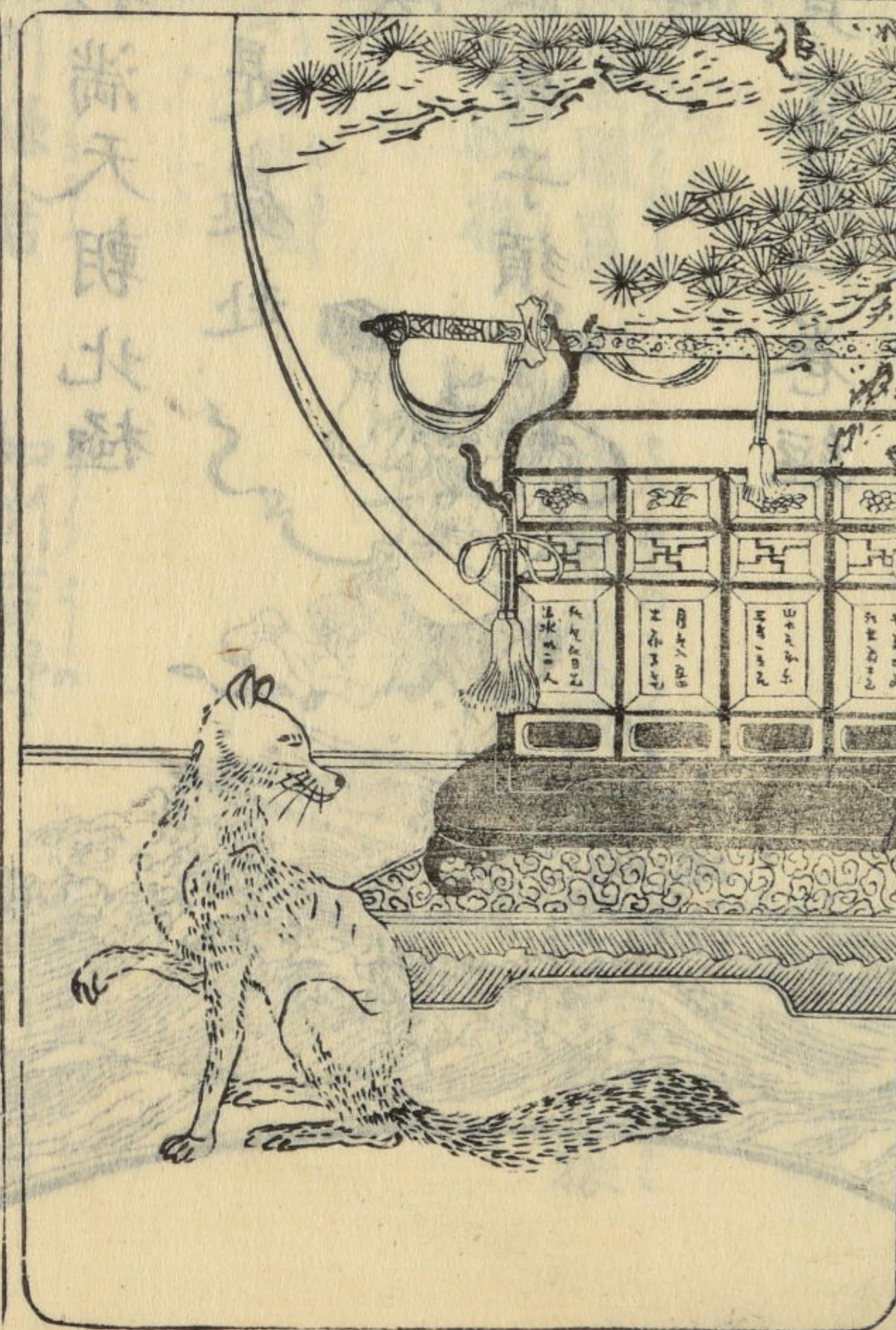
星鈞上

笑玄勣

匣中霜

靈明

三德性无靈



萬般物象

五色山會鷦鷯鷀

法能鑒一

個人心不

可明匣內

牛開鸞鳳

活臺前高

挂鬼神驚

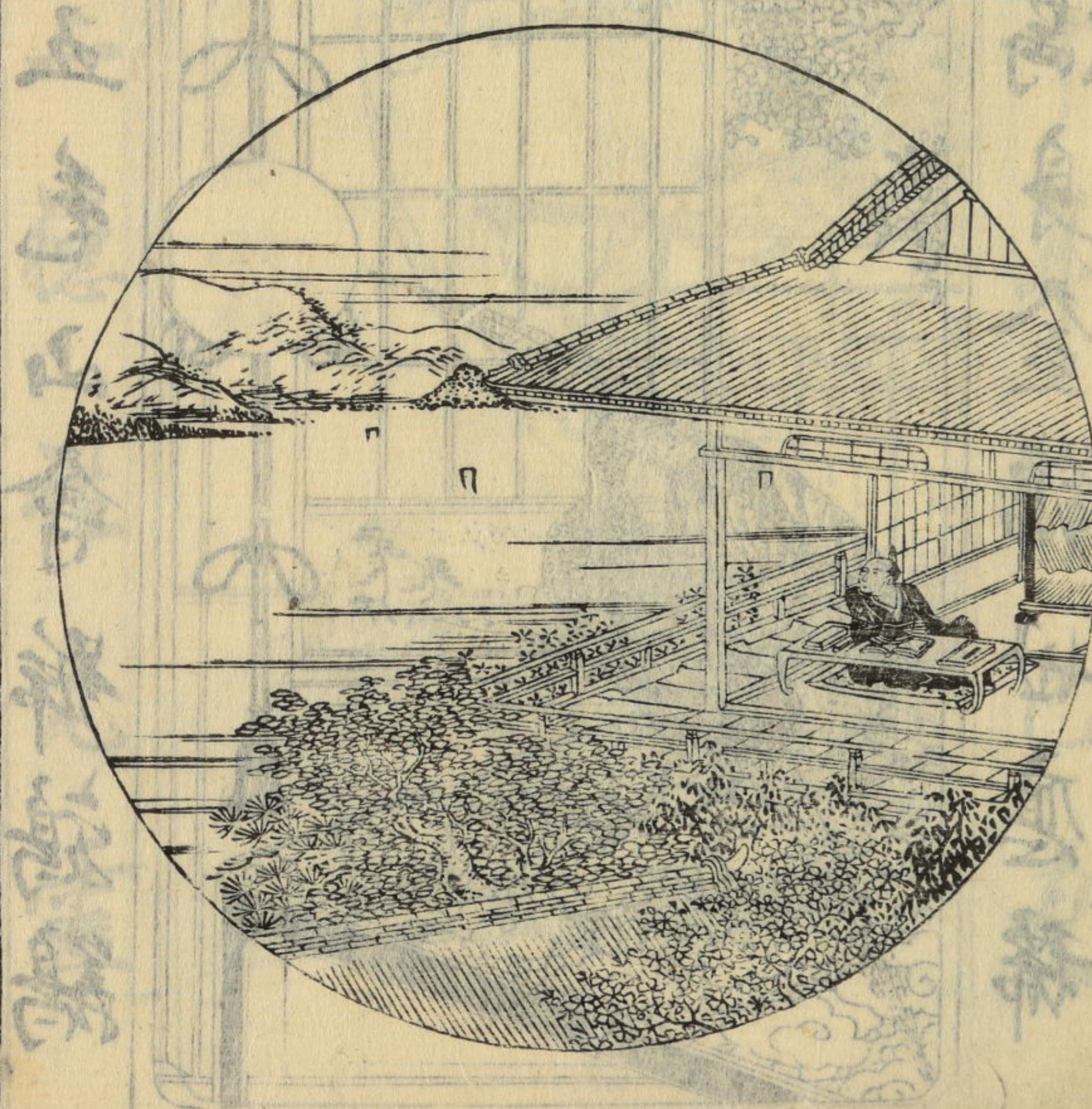
滿身金錦世應稀



第一篇

江州志賀
舊都

山毛水光陽
旭斜生無鶴
大有歸鴉千
村萬葉皇都
迹不見人煙
空見花



月水奇縁卷之一

東都 曲亭馬琴著編

第一回 蛮夷貢鳥釀殃
國宰試鼠探獄

天小風雨の變ゆと死へ五穀との變。國ふ干戈れ難ゆこと死を万民
困窮せ。本朝元弘延喜の兵乱より以來鬪戦少む時々。知瀆
民はる坐。瘦狗原野に斃。春櫻林木小巢る。足利尊氏公より三代
義満將軍の治世不以きり。天下を免て泰平ニ歸。士民安堵
次。應永四年夏四月義満は北山殿小隱居。室町打當中を四
世將軍義持小歸り。あくふ放て義持巖君義滿不かう。天下
の政を覗みて數年。王化四海ニ布。四夷来貢。時小補光帝の

應永二十四年。南蛮國より駿馬一匹と山鷄雌雄を貢る。義持公馬を營中れ厩小繫せ。山鷄を江州の刺史佐木高貞に届養甚矣。柳佐木氏比高祖宇爰天皇の龍種敦美親王にて先て源姓を賜ふ。王の末裔兵庫頭成頼を屬の臣となりて江州佐木の城に居住し。佐木氏と稱す。まことに高貞ハ成頼より五代源三秀義六世れ。幡孫佐渡入道道譽の係嗣す。江州觀音寺ふ在城。北陸七州を管領し。多賀六角浅井の支戻。かく一城をきたり。高貞件の山鷄をえらぶ。この鳥尋常のりれり。あくびあくび。うのうち孔雀うなづき。頭よ丹朱の雞冠を以て。身に金錦の五采を具足し。鮮明炫燿りつゝも愛びて。敏々金銀珠玉を鏽。龍鳳花卉のうちを刻。飾る真紅の綱をりく。

やう。高貞欣然とてひごゆく。今執事管領君。龍ふ縛りの御内とし。避近南蛮来貢の奇鳥をりく。予ふあげり。と家の面目何うこよ。ふあらんぬう。籠中ふ養。巢れうちよ雛成得て將軍の御感。まあがれ。かく。ふれども異邦有名鳥四時。北寒。暖を察。一籠畜せんといと安う。孰うれふうう。とく。この鳥を養。紳人とのすま。時。二個の武士諸士の班を出。君公ねうへこの鳥を臣ふ畜あえ。とく。高貞あまことく。ふく。人年紀二十八九。身丈高く。面急白。頭ふ一頂の鳥帽子を戴た。身ふ縲縲。素袍を被り。この人。是佐木の遠流。永原左近。尚潤と名告。もまち高貞の孝臣。左近頭首。とく。臣前年。このとく。和漢の名鳥を養ふ。終ふ。筆銅を懷じ。夫山雞。

あらひへ錦雞と号すの鳥もぐら毛のひろよだを憂。水ふきの影
をうつて終日去らず。遂ふ眩溺死をとひ。聖一魏の時南方山
雞を獻せ帝その鳴辯人とを欲せば由ナ。公子蒼舒太子
鏡をその前ふ著しむ。鳥の毛比グ形を鑑。なちまら鳴辯て止とを
ぞ。終ふ記すとや。蕭仲將これをあひてはく作せる賦あり。このこと異
苑ふ詳なり。さて唐の李商隱が破鏡の詩す。

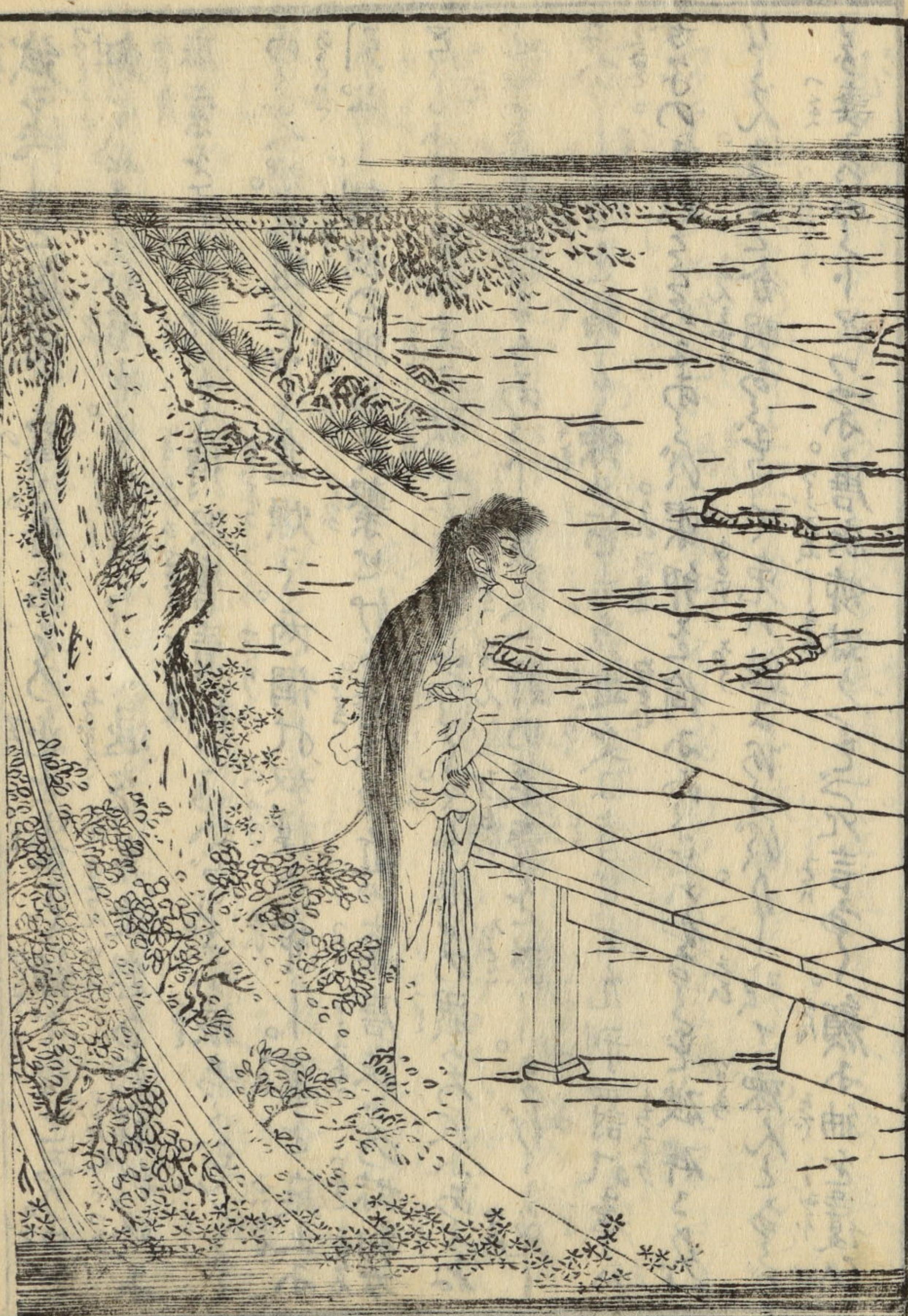
玉匣清光不復持
秦臺一照山雞後
便是一孤鸞罷舞時
と作るは是より。あふてころを人丸の和歌ふ
山とうみをろの初尾ふ鏡かけとうふをこぎつけ免
と詠す。又この鳥宿と紀ハ雄雌うそば峠を隔て栖む。萬葉集云。

サレゴモ心ひもみのつや引の山かられ尾のアハルこのよを
とす。又かくし夜をむこうか寝人と咏す。山雞の性人ふ別を。
サリを養狎人正容易をばとつど。臣ある別ふ身假あり。公う
チアヒとせて養へりと。言語水のみがまとく。和漢の改革を
奉る。又精り免をば高貴心中大ようろとび。完人ふとく放じゆく。
さればがとむとくをとく。今この鳥をあがへ。元是室町家
うちあづくらす。鳥うるをみて若等内かく怪あらば汝が一身を
表のうかよどきの罪全くされふ歸も汝の性緩怠なまべ。これ
との過あんとを怕る。日夜よくろろを用ひつままで凍ふせると
され左近唯とて命をうけ。あれが以て守る志度の属城
ふ庭籠を修造四方ふまく築牆を構て狼狽の害を防だ。又

あるる夜、篠ふ養食て、こゑと内房の窗下に置か。近づくと、飼
飼ふ。左近と妻唐衣へ鎌倉の管領足利持氏
の熟權植松憲實の家士熊谷勘解由が女あり。去年男の子を生
て、乳名城源五郎と喚ぐ。この児生る日、父左近湖水ふ釣
一尾の巨鯛を獲たり。こゑをりその児ふ名はく。聖人鯉を得
く。伯魚と名づけり。故車ふ做す。この年内父能谷勘解由身
子。嗣子うだふよりて、その家幽施し。重ねて左近縫倉ふり。唐
衣が妹相手をひいて、家ふ養ひ。相手客姿施麗かく。眉を
遠山の縁を因。肌を芙蓉の露を凝らし。花唇月輪音。秋波人
をいとく。春心を動かし。車ふ同藩の士小三上和平氏漬とつづり
あり。齡ひまき。壯年みまだ。く射藝ふ通ド又とく墓を囲む。

左近が又、圓基石をさむ。其よの家志賀ふあるをり。常に交
加で断金の友とせり。和平一日簾間より相手を闕窓窓
懸想し。のへと男をめし。婦を娶るがく。佳人をこむと且暮思
ひ。よどみどり。有難事ふ。左近へ廉能の士あれば。白地ふその車を告
げ。影護只。以てば。遠山の花をひびきて。風雨の過んとを愁ふ。ふ
仰き。二鼠と争ふ。逝て應永三十五年正長と改元。正月十八日
勝定院義持薨。ひ。家弟義教箕來表を兼じて將軍ふ任せ
らる。今茲三月左近が家の山雞卵五つ生ぬ。左近もろびふ。珍づ
くりて。あををらる。ふの卵ゆづく。五色れ光澤あり。大小馬
瑙の。よ。とかうち三つを巢ふの。二つを白金れ器ふ盛てこれ
を。繫ルふ。置家吏上市丹治をよびく。され日未養。狎の

功ありて名鳥イド冬て卵を生ぬ。明日これを主君に獻ト。襄
貴ふあづらやとせりあり。奴婢へまぐて康忽ちのあはば。アリ
恨てうち床ニモあひが。誰もあと許さず。此の一室に
入とたまわらずと命をとば。丹治かとてたらぬ。左近只官
三うろこび独卵をあはれて。暮春の天氣遅ると朗ふ。白鳥紙窓を射く。竹影を画す。暖
風肌膚ゆる。閑室睡眠とり。サリ金んふ。傍をひて坐寝
けらが。女選ありと見て。九月をもるに。器中れ卵一つをと。只一
あをなれば。こいにこやうだ。又身を側く。身後を背ふ。射然
腰ふ衣を彼なり。左近勃然とて是を除。誰うらが裳ふ衣を被
まひがとす。サルハれバ。侍兒漣漪うて出。曉てり。妾家公
の假寝ちとすとぞ。アリと風邪に患やあらん。和ふ衣を添
あおむせと言ふ。死ざふ。左近怒ひ頭ふ覆。左うちあらま。浪が聲
相ふ。孰が許を得。狼ふこの室に入て卵をう。あひが。ま
うと返せ。仍陳く歎。あ母苦痛を受。まどと奉をあげて。
髪際を連撃す。毛髪三千絲。艶顔聾。家公ゆりたま。
妾實ふ卵をあらびと叫。左近はまく憤。あやほく。あんゆ
まる時。丹治うて来て。竦らく。君日未の寛度。あわびあ。など
女兒を鞭う。少刻怒を勢ふ。こゑと同。とふ。左近
丹治を破。と疾視。こゑの行の顔あり。うづ前ふ舌を動。や。嚮
ふうし人をこの室ふ入りとあはとて命を。沙隨弱ゆ。か。禍
を引。う。沙隨く退け。これ賊婢をうち殺。もの。新刀を



武と一と敷居て罵る。丹治の仇を察し、諫がれをきう。口を鉢くぬまく言ひ。とどくとて退り。左近怒る。解け終ふ。麻索をりくほく縛。只官責向といへども。さふ浪あくよくすあうぐべ。左近ゆく焦燥。兩個の奴僕小命。渠を庭上ふ引ひ。櫻樹の杪を繋せける。時ふ左近の妻唐衣の妹祖女ともすうて出夫の被ふとぶりてゆく。さふ浪あくよくねど渠願意あるすとあうト。良人一片の意變を詮。うげ、免へゆくと言を謂て練せむ。左近又は肯せざれ刑罰れ事ハ女子のあれとまよあうべ。渠卵を偷ふあひかうせ破碎のならん。あと分明あうべて免へ法す何うべ。強て練んとあうふる妻あうとつふ。唐衣姉妹えど死言す。額ふ袖を覆ひ。

氣を歎声をあびふく。彼を哀憐せ。左近は人のとまう。篠直にし、性烈の火のとくとく事を決闘きて人をあひむのをあきらめ。此時已ふ禍の来て死すをありえん。遂に諫を容がる。侍婢本主人のあい想人とを切る。姉妹きたとけ。後けり。侍婢本主人のあい想人とを切る。姉妹きたとけ。後壇に出ぬ衰むアシ。浪身ハ喬木の枝ふつを。鞦韆の裁可む。髪ハ櫻樹の梢をみだれて花ふ拂のほり。糸糸ふ。髪の毛圓もとて索皮肉を破す。渾濶若くして樹下の土溝よ下ふ。公の奴僕ありく枝をあげてあひとをさうそび枝條を搖動して花ふ。ばく散乱を只見冥府圓羅城は罪人獄鬼の杖に追ひ。更に大喚大叫喚の呵責をうながす。小髪髪なり。痛か心神脱ふ脳乱。眼看正あひを。口言ことあひ。三井の晚

鐘亮常をほげく。栗津ふるる辟鶴も。うが身をあくと疑る。
さふ浪今ハ苦痛ふ。堪び声をあがめて。のく。家公頬へひき
めをゆく。ゆく。寢をゆく。告をゆく。左近これをゆく。呵くとうら笑
ぬ。苦痛ふく。よどく。ゆく。首伏す。それそのち釋よぐ。さふ浪又云。
妻元未思意や。怪て卵を破碎。家の怒あへてを怕て窓ふく
を捨なり。その罪千引に石ようも。重とく。とく。家公十分のあらむ
をくれて。妾が一命をゆく。ゆく。左近冷笑させであらめ。する
をかがく。夜のをす。将釋く。得よどく。と言つ。木履を穿く
床とふ脚立。揃ひり降くる一條の索を因ざ。只一刀ふまつ。と
断ば。さふ浪地上ふ。石と落俄。せうく。息絶ゆく。兩僕慌忙一個
へそれを抱起し。一個の槽架の水を掬て口中ふ吹ひきに。尋緯

至れる何ゆく。左近も。えく。怒とあらめ。這婢自家自得死を
予も誰をうらうらさんとゆく。亮隔引たゞく。裡面は入せば。奴僕亦
刑罰の剥剥をそぞく。心中且もされ。且哀ミ。屍を軽く外車出ぬ。
この夕榆莢雨。浦うぐく。窓竹うぐく。漏刻枕ふ。禁じて。夜やれ
つゝ間あり。左近は。あは。一室ふあらう。うろ櫻もとなの。一すば。
おとり燈を掲げ。書帙をもたら。史記の李斯が傳を讀ふ。
太倉之鼠。飪飽食而不驚。廁下之鼠。穢食而畏人。
とりよとよふ至て。燈巒をむとび。陰うぐく。匂地うるふ。匂脂
走く。完子入ぬ。左近は。あは。うや。燈を幽く。顔を几案ふ。若
陽睡く。ことを定観。女選ありて。罷又完を坐く。九十不立。正年。

再三四下をくり。既ふ主人熟睡乃がちを視て遂ふ几上に走
登り。前足をりく器中の卵を抱く。この時許多の龍尾衆
こうすう。前ふせめる一氣左尾の尾を衝く。復ふ引ば。次の尾又
こうすう。前ふせめる一氣左尾の尾を衝く。復ふ引ば。次の尾又
えの尾を衝る。衆尾連々とくろく次第ふぞの尾が附く。逡巡す。
を食せしむ更ふ引ゆ。と數百歩已ふ宛よ入へんとて。時ふ左近九城
礎とす。辟尾の響はどろだ。卵を捨尾をよろしく宛ふへまぬ。
左近の光景をとぞ。あざれ慙愧し。嗚乎龍尾もかく食を倫ふ
智あり。人間却邪正を照ふ眼也。今氣の卵ふ灾もとぞ。に。
先の一卵もそれがゐる。盜りて疑へ。志もと吾智治く慮
足してことを曉ぜ。罪とぞ。浪ふ歸著て攘ふ所責を渠苦痛ふ
也。さう不正な陷て往來の罪ふ死も。吾遇てり。吾遇てり。昔時
也。

唐の蘇味道茂陵。兩端小持て。久しくあそのち邪正やびぐう
こうう。古今廷尉の怨を聽獄を斷て實容易うづと乞詰く。疑
わん。たゞうち散只管後悔。ぬく。浪が死をあらむ。石子の靈を
葬せ。僧を供養し。善事を終へ。りづきの亡靈を尼祭けり。

第二回

接二物。左師。説因果。
投千金。寃魄索。解脱。

是年の夏。永原左近が宅ふ恵異こそ出来よた。妻朝起て
炊人ともか。柄杓あづく。躍出。庖桶をもつ。者甚麼と考る
に。看ば。盆鍋俎のたゞひとく。板架をもみ。或は梁の工ふ附或
は機板をうち。奴婢よこ色をそぞりの六神を累ねて頭を
奉さりてか。女剣。片響音あざまうぬ。一人ごろを張て左右を

視不器皿。棚はありて平日ふかむる。乃も為怪となりと裏
皆集り。鬼結。左近のをゆく是狐貉の所為より。せよ先
王もあらず。猥淫税を作り。之をいづく。殊ど是より後脣も
何より家鳴動。夜は鬼魅の哭声をえ。とゞ怪異のをあら
け。一夕妻の唐衣烛を粗て廁ふ登んとぞよ。稼つま一株の
麻索あり。脚ふ捕箭。之をあらがひ死のたまねば。妻一もつれて
手を放せば。その索むしと蟲と蛇のび。せぐと長くあり短
たり。たらまち裳衣ふ纏つたるべ。唐衣たまうべ一戸喰と叫て燭
毛々遙彼首ふ投や。搏倒く息絶たり。妹初のみ声ふやとうさ。
燭をてまく走出生ふ唐衣外死く歩廊ふあり。行の所以

もくはなし。衆皆慌忙。口ふ某を汝へと。左近に卧房ふ伴ひ
こうく勦る。少選ゆて甦醒。こゝども。兩足索のすつりとれ
り。あら腫あら。痛楚。左近中夜人を走て醫師を呼。針
灸。神軍の術を竭す。ひまふ。曉天。すまう。蔑熟。是より食
きく。苦痛。女房。祖女。はく。湯剤。をすまえ。左
近も枕邊よりて看疾。もろ。病人動されば鬼魅。厭鬼。と彼處
みそサの至る。こゝへ鬼の来る。あらむ。一助。すま叶。癡
語。時々。全身盜術。四股漸く。枯槁。是。金玉。浪が
寃。魏の多。こそ。おもむと。左近。也く後悔。修驗の道士
道高の老師。を招く。病厄。を禳す。護摩檀の餘煙。昇く。一束
の雲。と。水晶。念珠。へ。束て百八の露。を搘。あれども更ふま

驗あく。病者おや衰かろ向死むかうとと。左近今いまハ例たと計けい竭けつてる。何
キ。ある人ひとをく云い。二井小稀世こひよれ客僧きやくそう。その名なを拓華たく左
師さとよこの僧元華人げんかじん。近曾園城寺ちかそえんじ。ふ寓居よきゆぢり。く般若
通ト正見まことみ不具足ふくそく。過去未ま來き劫ごくを察さ。吉凶よきよしを判はん断だん。精鬼せいきを駆の。苦病くびやうを退治たいぢ。左近さうきんとれを拓たく今政いまの病びやうを治はらす。
左近さうきんと薦すす。左近さうきん大おほ小こ多たとむ禮れいを尊そん。かの僧そうを拓たく。次つぎの日ひ差さ師し奉まつ。左近さうきん出で逐よ。左近さうきん此こをぞくよ貌めいハ松まつと立た。瘦やせ心こころに紫しを將よ。沾しみ身みふ忍辱しのぶの鎧よろいを被足ひしゆく。募緣ぼくえんの鞋くつを穿�右う手て。小鮮虎こせんとらの鐸と採あつ。左さ手てふ降龍こうりゆう鉢ばつを捧ささ。飄然ひょうぜんとく。既すでに。左近さうきん頬ほ不ふ信しん伏ふ。左さ手て近ちか跡あと。云い。差さ師しねま。荆き婦ふ。鬼き病びやうを濟す。左さ手て足あし下したの宅地たくじ禍わの根ね。生死死生。

佛ぶつものものもああらら。貧道ひんどういうれ。救すくが死死。且また婦ふじ人の死死。且また夕ゆふ足あし下した。又また劍けん難むずれ相あり。ようくう及およ及およ。ああくくどどと。袖そでを拂ぬく。左さ近ちか急いそふ引ひ。左さ師しののああとと一い剣けんを惜うむ。ああむねね。左さ近ちか禍わを穢お。福ふくをむく。荆き婦ふが鬼き病びやうを濟す。と再三ざいさん再四ざいよん精せい止と。僧そうの言ことの信しんを察さ。身みび生うつ死死。云い。禍わも除よ。病びやうも治はら。左さ近ちか是これ天まき。ああくくああとと足あし下した原忠義はらただよしの工く。ああくく捨すふ。忍しのぶれ。袖そで。左さ近ちか。王おう。左さ近ちか。云い。この劍けんと羽佳はと名なづく。法衣はり。衣き。袖そで。左さ近ちか。劍けん。左さ近ちか。五郎ごろうの防身ぼうしん刀と。鏡きょうを玄丘げんきゅうと号い。背せ小蘭菊こらんぎくと鑄つた。鏡きょう。家いえ良らうの柱しゆ。桂けいやや。左さ近ちか。この二物ふ。ササ。精せい鬼きを駆の。

足生。夫劍は陽物にて威ありたり。鬼は陰より形を犯
たり。形を犯すものとなり。威をもつてのふ遇是故ふるの娘を銷鑿
して勝てぬことをすむ。故ふ鬼は劍を畏る。鏡も亦陽物にて
透明ありりのあり。精へ亦陰物にて偽縷うきのみなり。仍と以
て明ふ當る。この見るふるの形を羅簪にて逃すと能くしむ
見るよ精の鏡を畏る。むく抱朴子の畧をつり。看よ後三日
みよ。失ひ。百日みよ。二物をうつす。五年を経て禍
不吉免す。消除す。又一年みよ。大不福あらん。予が言葉をば
後もづく悟てあらんといひ。屹そ席を立んとするを。近若
小家隸小命。准備の布施物をりちまへ。免られをそ
めく云。聊師の恩惠を謝し。其の願へ納々。僧辭。道

正月の正旦。飛賜の身あり。いつぞ一物せ礼謝ふあらん。てとゆて
あて受び。遂ふ筆を讀み。免祓ふむじて偈を書く。云
鐵鯉辭湖。金烟没地。奇鳥雙飛。
靈獸走隧。不レ夫不レ兒。為レ讐為レ魅。
解脫二物。自至。菊蓬重陽。
丹丹是革。須見因縁。件件存字。
僧侶を書了。筆を捨て。然うて去ぬ。左近のを。一ふきこゑ。
剣を源五郎が護身刀と。鏡を良才。柱ふ挂せば。唐衣が病苦
ト免く間あり。寃魂れ業。左近のを。一ふきこゑ。
度三日みて終ふしれ。左近の妹。祖女が左近のを。病者日。左近の
愁傷いとさらみて。世を空蝉む。夜も。紀念の薰き。左近の哀悼

日をあつゝ遇七の追鷹之間ゆく且若華左衛門言神のぞれふ驚嘆
し。あれらのちひうなる禍あくとそぐふ齋志まゝ無異を祈る。劍
鏡の衛護やありけん。其の後の家内が怪もあく。そ妻れ中陰もすら
云ふや。早晩うち既ふ立秋の節とありえり。親族集會てま
壯年の艱うて在んに舉児のるやもあらず。且婦妻免家ハ因事少
貴重。後妻を娶り。雄彼と擇んどう。相女あらず。又。
源五郎が為ゆて促母う。是ふをそりのやあく。あ止歎の中へうろこを
ひきりと薦め。左近も乍免のほどハ固辞りを。の言ひぐく
理あるをゆく。禁止。あくとく。相サク替ひ。とまうをも聞て多
く。一案別意免不於。近日主君の續て婚をとまう。とゆふ
親族まことにびて初女をひととそりひせり。うつみの準備をすね

浩處か三上和平ハ。相女を眷恋。うとうとすひまゆ。志らく永原
が家ふくさりて妻女の不幸を慰向。うそをかく。相女が顔を下を
十分のたゞして。徒半月日をかく。うるが信とそろば死。うぢくと
見形をかく。苦しみ沈黙。一言を通せば。そしよ。恋死んひと
ぞ惜。うれかく。身をそぞく媒氏とく。婚を一終じくえどと。遂に
早瀬蟹庵とく。医师をかく。左近この事をいひをえられ。左近これ
をすて。三上氏の事へえれ。平生での爲人をあせば。秦晋とあらん余
妨か。あらへある。このことを左近の障ゆて。うのひがく。其へ後ふか
られ。てと參入。蟹庵。うぢく。立くなく。和平ふく。言を。和平
大ふ望をうながした。近づ。故障ゆことひよ。いうある所以あらんと。私
疑をうながす。怒同只忙急と引籠居。うぢく。二旬足らず。後蟹庵

幼來く。左近と後妻を娶ふと。和平竹人の女を娶ると
同ハ足下縁。前妻の妹祖女ありと。養ふ和平。後ろに左近
を。これ永原が前妻世ふあり。一日この奉を計。祖女へ是の妻を
てあふ。うそと。憩ふ猶縁。萬幸。正ぐく。觀舞。所詮縁ふ
たまを。世中の美人集。ひうみ限らす。うちまち思を傳
え。うちへこの奉意。がく。弥左近と。睡。う。うける。頃年。大津の
駅。ふ一個の退糧人あり。元へ播州赤松の家士。さて石見太郎。とよ。
仰と定。左近生業。ひえれど。親族不富。家勢。扶持。もすりれ
あり。と。驛舍小金をか。その息錢を得。家事の助。し。
奴僕五六人。養て。その家勢。づく。貧乏代。時へ八月廿三日の夜。倫兒
二人。石見が家小石のび入る。主人。お食事。うち。二賊を捕らり

つづく。傳て一室に入。お化。左右。燭を。坐席を。輝。う。の
後。ひゆ。者。食厨遠く。肝。響出。ふや。兩賊。綱。眼。見て
云。猪。主。主人。民夫。あり。天明。ひづ。方。將。新刀。を。試
ふ。ふ。と。あ。え。か。家。小。手。わ。る。不運。さよ。う。それ。と。も。一度。ハ。劍。下
れ。鬼。と。う。危。身。の。今。う。行。悔。人。と。あ。く。か。竟。朗。あ。く。列。居
ら。時。刻。す。う。ま。寂。莫。ふ。猿。首。と。回。て。四。方。と。え。ね。が。左。邊
の。聲。ふ。一。張。比。懸。幅。を。掲。て。紙。中。七。言。絕。句。を。録。う。一。個。の。倫。児。少
ち。漢文。を。詣。得。う。け。ん。文。を。讀。ふ。う。の。待。う。云。
秋。雨。溝。溝。江。上。村。
相。逢。不。レ。用。二。相。迴。避。
倫。児。これ。を。聞。て。大。ふ。お。う。く。と。う。ふ。家。僕。業。を。き。じ。ま。ま。と。う。兩。賊。



の前小居たり。僕器されば奇麗やく盃盤前列る。兩賊よ
く賸羨て蹲踞とば。主人立坐り。邂逅來爐中夜
饗食を免れか。アリ。麻條を燐すとあべ脩鮮て喫一夕
以て死。左僕坐く。傳を釋。兩賊さて食ふ飽もてのち殺を
あんと顔色ならぬ。蒼然て飯を食ふ。主人これ
をぞく。二雛あらとある。原是惡意少く。あく。吾も二雛と
葉をあむト。石見太郎。とり。盜賊。され。一を赤衣
家ふ住。が。石見太郎。播州を退去。近曾。この大津ふ来。アリ。賊
をあと。官も主とある。故いふとある。他方。支黨。アリ。盜とろば衣服へ功綻。一。繫あり。ハ夾服。アリ。裕
中之繫を入。或。繡。アリ。染刀劍へ功解。て裝をもみ。家

内小深家。アリ。衣工。アリ。て。繡刺。かい。夜中。紺の。アリ。腰仗。を
あ。售。代。狼。小。貿。ふ。當。ど。こ。を。アリ。今日。首。と。胸。と。離。別。セ
亦。二。雛。アラ。童羽。筋。筋。アヒ。アレ。多。計。渡。アリ。アリ。志。を
か。アリ。五。手。從。ハ。万。軍。を。指。揮。アリ。扶助。も。アリ。と。ノ。兩。戒
サ。アリ。アリ。度。アリ。言。を。安。て。ア。モ。ア。シ。ア。ビ。ア。ハ。ア。ル。豪。像。卦。詐
ウ。君。不。從。ア。ン。吾。黨。羽。十。人。ア。リ。二。人。が。名。を。海。道。次。夜。又。五。郎。と
学。自。隊。の。夥。ア。山。峰。の。難。猿。濃。松。の。に。外。籍。傳。助。埋。史。の。權
九。郎。姉。の。三。平。曉。の。六。糸。因。果。の。頑。西。坊。アリ。是。多。怪。有。の。濃
皮。ア。リ。ア。リ。渠。卒。免。ア。リ。ア。リ。動。され。バ。絳。綸。を。ア。リ。ア。リ。終。ふ。事
を。ア。リ。ア。リ。今。ア。リ。この。兩。人。君。不。從。ア。リ。ア。リ。孰。う。推。辭。ア。リ。ア。リ。
と。言。を。ア。リ。て。是。ア。リ。バ。石。見。太。郎。状。若。ア。リ。笑。ひ。早。速。の。因。意。

幸甚。密奉へ緩ふ緩ふを喫へ。まく飯を喫へ。とくへ。兩賊
瓦ちうち賊虎の肉を獲キ新どく貪食す。胞ととをあく。を。
酒食をかく。石見か云密談別奉ふあ。知州佐木高貞は富
數郎を頼。軍實は黄金志賀の属城ふ。されよりを偷
さんと計ふ。と久ーとひどもこの地へ永原左近これを成。そ
要害堅固か。容易裸入ぐ。あるふ頃日を。便宜を得
たるをあ。速よやかに立んと。吾们今月晦日の烏夜に
あて潜入ぐ。あくやく過年うち小船ふ掉。栗津河
來す。會へ。丸道形ふ五あり。金道とひ。木道とひ。水道
とひ。火道とひ。土道とひ。金道は銅鉄のうちふ匿。水道は水
を得て隠。まよひの物を獲と見た。明の冷纏とひ。のよ。

この術をかせ。と笑。氣のまじこゑの術を李得がとひ。ど。
埴を踰。壁を挖。工をう。も古人も車の密う。成と。ば。多。も
渡。と。べ。と。と。圓金三十両とり。す。との。月の資料。うて。こ
れを与。と。が。両賊。ましく。まく。と。ひ。鶴明ふや。びく。辭去。既ふ提
用す。あり。石見太郎は竹生嶋ふ。船ふ。と。く。船中ふ酒食を
設。家僕ふ棹。と。く。琵琶湖を遊。瓊。一。船を栗津の。と。ふ。擊て
日の。く。と。候居。た。ふ。甲夜の。ころ。海道二夜。又五郎八人の偷兒
を將。快船ふ。うち。を。來。會。と。石見。裏。賊ふ。相見え。準備の酒
食を。の。と。と。歎待。と。是。うち。亦。船を唐峠の。邊。ふ。艦あれ。は。
早晚。夜深。人定。夜半の鐘声。賊船ふ。到。る。石見時刻へ。お
ど。松底。う。皂服と眼罩を。と。り。出。裏皆一般ふ。裝せ。遂可

陸地を出でて行。已ふ永原が前門不以手とば。辟かまうて吼る。
を石見袖のうちうち魚肉のへる搏森をこうせりとく投とば。大
ハ勿地尾をうりく却賊を愛せ。そのかまた石見太郎内と篠榮
齋を跳え裡面うり門廊をくみて衆賊を引人と石見をば
客房のかよ志のぶ折と見まし。庭匂うく山低く泉きくもみす。
まから池を遠く樹木あるかくふ到ひ。内中ゆきか女の歎声と石
見燈罩を奉てことをアリ。桜樹黃葉の下簾ふ一個の女児
髪に蓑衣を被る。左の腕を傳られ宿と住居たり。石
見驚とせり。左右の人を負はざるを結め婦人いふあとべ中夜
さみさ居ゆ。何の科ありてう引傳をうけむひ。釋く。うあら
び一やとくべ女児涙を瀉然とあが。捨死人の言也。さうとせ

家の侍兒さる浪といふものあり。正雞の卵のとよ。との身を實比
罪ふ死て遺恨止と見る。この家ふ崇ゆせんと。古今内政唐衣の
命をたうそまろふ道高の妙智力ふ限れぬ。まじ寛を報ふとさ
をと君がる。客房良の柱を挂たる鏡を把断。この傳を免
て。この報ふと貰金の在所を教さむよ。とよに邊の覧
も胸を方たせり。起ておぼえ一が。元より不敵の劇賊あれ
さあぬ体ふうち恐れいと姿にてぞえ。將鏡をこうく得させと至
しといふ。客房ふ潜入する。おどりて柱を鏡を挂て締の袋
ふ包た。様もあとと不思べ世ふ類る。光明鏡あり。こうよろこび
てこれを納め外面ふかく鏡を小賊ふ交付。又元のまろふ立
く。さる浪が寛鬼ふうちじく。まろ安丸鏡へ既ふ遠とけまを。

市もハ傳を解下と。明星は刀を引抜たらば索と云
てけべ。まゝ浪つと至り。哥姫レ君が一力ふ頬脇に轄を斬れ。あれ
えりくふのうへるすへ庫ひ。財ハ客房付南ふゆ。車馬を以て
前ふ三やかと劫ひを殺ハ消ね。石見奇異の事也。モ札
ひをもみて宝荒の前ふせり。鎖と幹闇く噸笛を吹き。せば。
衆賊ふ集來て金を偷去。數万両。石見古びくこゑを
私ナ運セ。肩抱だやゆりけん。おも一隻うち強盗を内房ふぞ
入。次に主人比附房と不え。燈をもよみて窓下ふ山雞の巣
あ。石見がとう笑ひ。二つの鳥と似しもあく。鳥比頭
を翼つ。うちもてを捨たりける。左近軒轅は音小聲に覗
腰刀を拿てて立出焉。石見を。燈をうち滅ぼ。逃げを。

逃下と追趕。二人終ふ客房付庭ふ會。東風西風桃戰ふ
この夜野干の暗ゆて。更ふ黑白も別ね。因く刀代亮と賊ふ
踏みく切ひも。石見やうやく拳をう。手口へりをづ
く。肩尖ふ。劈割たり。腰に以て。左近竹刀を疾
一條の麻索不政化。ならずら撲地仆け。石見得た。とぞくひ
を。善惡無分。總表。只因忿怒釀殃危
勸君堪忍。預誠信。短恩。從來是禍基。

月水奇縁 卷之一 畢

